

第9話：アビイちゃんのぶるんぶるんナイト

アビイちゃんは、お気に入りのカーペットの上で「今夜もお願いね」とばかりに、目を細めてうずくまっていた。

飼い主の手が背中に触れると、ふう、と小さく吐息。

それが始まりの合図。トントンタイムである。

そこへ――

廊下の向こうから、ビオラちゃんが、音もなく、でもいつものように風のように素早く…ぬっ！

「わたしもここでいいかな？」

というように、ちょこんとアビイちゃんの横に滑り込み。

アビイちゃん、一瞬の静止。

ビオラちゃん、期待に満ちた眼差し。

…そして、私は思うのです。

「さて、一人用のトントンが、二人用になるのか、交代制になるのか――それともお説教タイムになるのか？」

アビイちゃん、香箱座りで背を向け、
お尻をぴしっと二人に向けたまま、
しっぽぶるんぶるん。

――これは言葉にするとこうです：

「今は僕のトントンタイムなの。

わかってるよね？ ……ねえ、ビオラ？」

まさに、背中で語る男アビイちゃん。
香箱という静の構えに、しっぽの動という主張。

アビイちゃん、香箱座りのまま益々激しくしっぽをぶるんぶるん。
無言の「今は…察してね」モード。

そこへ、ビオラちゃん。前足をそろ？りと出して…

ちょん。ちょん。

アビイちゃん、少し振り返るそぶり。

…ビオラちゃん、引かない。

そして——！

??「ぱたっ」

小さな前足で、しっぽを両側からそっとホールド。
それも、あの短くて丸いおててで。
アビイちゃんのしっぽ、そこで一瞬止まる。
部屋に流れる、気まずくも愛らしい静寂。

——私はふと手を伸ばし、
そっとアビイちゃんのしっぽをつつみ込んだ。
細くて長いふさふさが、指に触れ、
ビオラちゃんの手と少し重なる。
静けさのなかに流れる、ぬくもり。

アビイちゃんは——
ちょっとだけ、しっぽをぴくっとして、
でもそのまま、じっとしていた。

「……これは、なんの時間？」
「トントンじゃない。でも、悪くない。」

三者三様のぬくもりが、ひとつに重なる瞬間。
アビイちゃんは、微かにしっぽを揺らしながらも、
怒りもせず、身じろぎもせず、
そのぬくもりを受け入れている。